



Ashiya
City
Museum
of
Art &
History

News Letter 2023.03

芦屋市立美術博物館

美博だより



小杉武久《Metal Interspersion》
1991年
ステンレス板、ソーラー電池、電子音発振器
各30.0×30.0cm

ソーラーパネルに光があたり電気に変換され、電子音が発生する本作は、リアルタイムに対面しないと鑑賞できない「音楽」作品である。1996年に開催した展覧会「小杉武久 音の世界『新しい夏』」で4点出品され、そのうちの2点が作家本人から当館へ寄贈された。

小杉武久 (1938-2018) 作曲家／演奏家

東京芸術大学音楽学部在学中に日本で最初の集団即興演奏のための「グループ・音楽」を結成。1965年にNYへ移住、フルクサスのメンバーと演奏を行う。1969年より「タージ・マハル旅行団」のメンバーとして活動、国内外で活動した。1977年「マース・カニングハム舞踊団」に専属作曲家／演奏家として参加、ジョン・ケージ、デイヴィッド・テュドアらと活動を共にし、1995年から2011年12月までの間、同舞踊団の音楽監督を務めた。個人でも様々なフェスティバルでの演奏やコンサートを開催、サウンド・インスタレーション作品を世界各地のギャラリーや美術館で発表した。2017年12月9日(土)～2018年2月12日、『小杉武久 音楽のピクニック』展(芦屋市立美術博物館)開催。

1

館蔵品紹介 1,8

展覧会報告 2

研究ノート 3-4

- 北原照久コレクション展—おもちゃ! 広告!
驚きと感動と心温まる物語—
- コレクション小企画
美術の手ざわり—記憶にふれる

- 別府と小出楯重
- 打出焼

学芸員コラム 5

- 芦屋の美術の再出発
—芦屋市美術協会の結成

休館中の美術博物館 6-7

北原照久コレクション展

—おもちゃ! 広告! 驚きと感動と心温まる物語—

2022/4/16～6/19

世界的に著名なコレクターである、北原照久氏のコレクションを数多く並べた展覧会。数あるコレクションの中から、「おもちゃ」と「広告」に焦点を当てて紹介した。

北原氏は、1948年に東京で生まれる。大学時代に留学先のヨーロッパで、ものを大切にする人々の文化に触れ、古時計や生活骨董、ポスターなどの収集を始める。その後、知り合いの家で、インテリアとして飾られていたブリキのおもちゃに出会い、興味を持ち収集を始めた。

「おもちゃ」は北原氏を一躍有名にした「ブリキのおもちゃ」や、戦前戦後に作られた「セルロイド製のおもちゃ」などを展示した。コレクションの多くは状態が非常に良く、当時と変わらない動きをするものも多かった。

「広告」は明治から昭和にかけて作られた商品ポスターや、メーカーのマスコットキャラクターのフィギュアや立体看板などを展示した。フィギュアの中には縁起物も含まれており、正座するピリケンや洋装を纏った福助など珍しいものもあった。

北原氏は、古き良き時代の庶民の生活を映し出す自らのコレクションが、次世代へと継承されていくことを切望している。これらのコレクションに囲まれることで、人々が営んできた歴史そのものを体感することができた。

関連イベントとして、開催日初日の北原氏によるギャラリートークとサイン会、グランドピアノ・ベーゼンドルファーの演奏体験会、学芸員による展示解説を行った。



ホール展示風景



展示風景「おもちゃ」

2

コレクション小企画

美術の手ざわり —記憶にふれる

2022/4/16～6/19

作品に用いられる素材の質感や、描かれた場所の光や温湿度、色彩による印象。私たちが美術作品から感受する感覚や印象を作品の「手ざわり」として焦点を当てることで、作者の意図や制作の工程、当館に収蔵されるまでの道のりにおいて作品が人々とつないだ「記憶」にふれることを試みる小企画を開催した。「絵画の手ざわり」「版画の手ざわり」の2部構成とし、18作家の56作品を展示した。

第1章「絵画の手ざわり」では、独自の技法により質感豊かな画肌（マチエール）をそなえた伊藤継郎の《鶉》《パイプをくわえた男》、吉原治良や山崎隆夫が芦屋の風景を描いた作品などを展示した。また、中学時代の小出楯重が同級生に贈った鉛筆画の《ナイアガラ大瀑布（仮称）》や、堀尾貞治の絶筆《NAGATA 記憶 1995》などから、作家と作品をとりまくエピソードを紹介した。

第2章「版画の手ざわり」では、小磯良平、福井市郎、菅井汲、松谷武判の版画作品30点を展示。リトグラフ、ドライポイント、エッチング、モノタイプ、シルクスクリーンなど、多様な技法によって制作された作品を展覧し、技法による質感の違いを紹介した。

関連イベントとして、ワークショップ「思い出の手ざわり—絵はがきを描こう」「絵具の手ざわり—伊藤継郎の描きかたを体験しよう」、鑑賞会「デザインの手ざわり—ポスターの秘密に迫る」（北原照久コレクション展に出品されたポスターを鑑賞）やギャラリートークを開催した。

(川原百合恵)



展示風景 第1章「絵画の手ざわり」



展示風景 第2章「版画の手ざわり」



小出権重画芭蕉図に高浜虚子句
「大地より 生えてぞ 青き 芭蕉哉」

1920年 紙本墨画淡彩 当館蔵

本作は道中お世話になった日名子太郎へ、お礼の品として贈られたものと考えられる。句は1908年の題詠句会で虚子が詠んだ10句のうちの1句で、画は「別府 五」『大阪毎日新聞』1920年8月6日の挿絵と同じ構図。



1921年8月5日

※この日、権重たちは別府に宿泊している。



「別府 五」『大阪毎日新聞』1920年8月6日（部分）

別府と小出権重

小出権重は、1920年7月10日から7月21日にかけて、俳人で小説家の高濱虚子と建築家の山崎樂堂、大阪朝日新聞記者の鍋平朝臣（本名・大道弘雄）、文芸評論家の勝本清一郎とともに、大分県の別府や耶馬溪、愛媛県の道後温泉を訪れています。この訪問は、別府の日名子旅館当主であり別府町長を務めた日名子太郎が、観光振興策として別府温泉を宣伝してほしいと虚子へ相談したところ、俳句をつくるために景色のよい場所や名所旧跡などに友人と出かけ、紀行文を新聞へ載せるという方法なら引き受けましようかと返答したことで実現した取材旅行でした¹。

権重たちを乗せた大阪商船「紅丸」は大阪築港から出発、神戸や高松、高濱に寄港しながら別府へと向かいます。11日午後3時、別府に到着した一行を当時の町長や助役、町会議員、旅館組合や新聞社の人々が歓迎しました。日名子太郎が観光の案内人を務め、別府、温水、亀川、芝石、鉄輪など各温泉を巡ったほか、当時別府に住んでいた歌人の柳原白蓮の別荘を訪問し、別荘内に湧く温泉を楽しんだようです。

この旅の様子は、鍋平朝臣が『大阪朝日新聞』（1920年7月20-31日、5回）に連載したほか、虚子、樂堂、清一郎が「別府 附耶馬溪、道後」『大阪毎日新聞』（1920年7月29日-9月10日、16回）で紹介しています。本紙では、別府へ向かう道中での出来事や各地の印象が綴られているのとあわせ、名所や旧跡などを題材にした虚子の句も寄せられ、別府の温泉地や景勝地、道後などの魅力が権重の挿絵と共に紹介されています。これを機に、権重の挿絵は新聞や雑誌などを度々飾るようになりました。

別府と権重との関係は、虚子たちとの取材旅行をはじめとし、1921年に渡欧する際に寄港した山口県・門司で下船した後に母モンと従兄福本平兵衛と別府に宿泊しているほか、1930年に権重一家と松井正が別府を旅し、風景を描いたり、16mm映画「別府行紅丸にて」を撮影するなど、豊かな繋がりが窺えます。

近年、権重から日名子太郎へ宛てた葉書10通とともに、権重が描いた芭蕉図に虚子が句を寄せた作品が発見されました。葉書には、1920年の第7回二科展で《少女お梅の像》（ウッドワン美術館蔵）が二科賞を受けたことや、1921年8月より約半年にかけて滞欧した旅先での出来事が綴られていました。ある一通には「別府の温泉の如くのとこだである処は世界にありませんね」と書かれており、権重は別府をとても気に入っていたことがわかります。

この発見を機に当館では調査を進め、日名子太郎の親族が大切に保管していたこれらの資料や作品を、2018年度のコレクション展²で紹介することができました。その後、当館へご寄贈いただく機会を得ることができたのはこの上ない喜びです。

現在も、大阪から別府行きのフェリーが就航しています。当時の新聞記事とともに、権重や虚子たちが楽しんだ別府を同じルートで巡ってみたいと思っている筆者です。

大槻晃実（当館学芸員）

註

1 高濱虚子著「くれない丸にて＝瀬戸内海を一周ー大阪から別府までー」

〔定本 高濱虚子全集〕第14巻 1974年、毎日新聞社 pp.93-99

2 ザ・コレクション「星のような一残すこと／残されるもの」展（2018年12月8日～2019年2月11日）

1895年に日名子旅館を創業した日名子太郎（1865-1940）は、1905年7月から翌年4月まで別府町長を務めたのち、別府町、演協町合併後の初代別府町長（1906年7月-1910年7月）を務めた人物で郷土史家としての顔も持つ。町長を退任した後は、助役と温泉課長を兼務し、別府温泉の発展に尽力した。

打出焼

日本では様々な地域で焼物が作られてきました。現代まで伝わっているものもあれば、歴史が途切れてしまったものも数多くあります。芦屋にも短い間ですが焼物作りの歴史がありました。今回は、かつて芦屋で作られた焼物である打出焼について紹介します。

打出焼は、1906（明治39）年に精道村打出（現：芦屋市楠町）の齋藤幾太が、琴浦焼の創始者である和田九十郎正隆の協力のもと、お庭焼として創業したのが始まりです。幾太は打出丘陵の良質な粘土に着目し、番頭の阪口庄蔵（号・砂山）を作陶にかかわらせました¹。

1910（明治43）年に、阪口が齋藤から独立して齋藤邸の南すぐの春日町に開窯しました。

1914（大正3）年に資本金1万円で合資会社打出陶器工場が設立されました。翌年に、大正天皇即位を記念して、神戸・御影の写真館が発行した写真帖の中に、その工場の全景写真が載っています。南東方面から撮られたその写真には、南北に沿って緩やかな斜面に作られた8段の登窯が映っています。

1915（大正4）年5月23日付けの西摂新報に、打出焼の全貌を取材した記事があります。そこには、前述の8段の本窯と1つの素焼き窯があり、8段の1つは大型製品を焼くために他よりも大きな焼成室であったとされています。この大型焼成室では、西宮市役所に隣接する海清寺の住職南天棒が、生前葬を営む際に用いた齋藤製の陶棺などの特別なものを造っていたと考えられます。また6、7台のロクロがあり、1つの窯の焼成時間は40時間であったと紹介されています。

1937（昭和12）年に初代砂山が亡くなり、坂口淳が二代目砂山を継ぎました。

1966（昭和41）年に打出焼の研究者である藤川祐作氏が訪窯した際には、既に窯元での作陶は行われていませんでした。



魚文茶盃

1973（昭和43）年に春日町が土地区画整理事業の対象になり、窯も取り壊され一帯の面影がなくなりました。

1978（昭和53）年に二代目砂山が亡くなったことで、約70年の打出焼の歴史が終わりました²。

打出焼の製品は、1935（昭和10）年の『武庫郡誌』によると日用品や花瓶、菓子椀、茶器などが主であり、販売先は大阪・神戸・奈良・東京が中心でした。また、三条町付近では民家の屋根瓦にも使われていました。記念品として配られることもあり、精道村教育会設立時の式典の参列者に、「精道村教育会」と書かれた一合徳利が配られたほか、1950（昭和15）年の芦屋市制10周年記念に、市章の入った菓子鉢が注文されています。

打出焼には銘が入っています。現在確認されている銘は、「打出」の漢字2種と「うちで」のひらがな2種の計4種です。漢字の銘は齋藤の楠町期のもの、ひらがなの銘は春日町期のものと考えられています（藤川2009）。

最後に、所蔵作品の紹介をします。下図の「魚文茶盃」は、全体的に赤褐色を呈した陶器です。青釉で絵付けされており、胴部に4匹の魚と4輪の花を配し、見込みにも2輪の花と中央には「福」の字が書かれています。また、高台内には「うちで」の銘があります。

打出焼はまだまだ多くの謎を持つ焼物です。特に絵付師の存在はなかなか見えてきません。銘や画風を比較しながら検討していく必要があります。引き続き調査を進めていきたいと考えています。

山本剛史（当館学芸員）



「うちで」銘

註

- 1 打出の粘土が不足してからは、信楽や京都など各地の土を混ぜて使うようになった（神戸1994）。
- 2 三代目は異なった陶芸の道に進み、打出焼を継承していない（神戸1994）。

参考文献

- 神戸深江生活文化史料館1994『特別展 打出焼 ―藤川祐作コレクション―』
藤川祐作2006「兵庫で焼かれた陶器（15）打出焼」『陶説』641 日本陶磁協会
藤川祐作2009「打出焼の歴史」『生活文化史』NO.37 神戸深江生活文化史料館

芦屋の美術の再出発 - 芦屋市美術協会の結成

1948年4月29日。芦屋の美術の歴史における、ある重要な出来事がありました。「芦屋市美術協会」の結成です。

芦屋市美術協会（以下、本協会とする）は、「美術文化昂揚のために美術運動を展開すること」¹を目的に、市職員・熊田種次のとりまとめのもと、芦屋市在住の芸術家によって結成されました。二科会の吉原治良、新制作協会の伊藤継郎、国画会の山崎隆夫などの洋画家、日本画家の福田眉仙や山田皓齋、写真家の中山岩太やハナヤ勘兵衛ら、当時第一線で活躍していた芸術家たちです。

本協会は、芦屋市展や童美展（児童対象の公募展）の開催を中心とした活動を通して、芦屋の文化の発展に貢献しました。本稿では、結成から75年の節目に、本協会の創立背景と活動内容を紹介し、芦屋の文化におけるその意義について振り返ります。

1 結成の背景

明治時代の鉄道開通以後、大阪と神戸の間の風光明媚な住宅地として人気を博した芦屋の地。ここには大正時代から多くの芸術家や文化人が集まり、阪神間モダニズムと呼ばれる豊かな文化的土壌が築かれました。

しかし、1930年代後半から、第二次世界大戦の影響が芦屋市にも及びます。終戦までに、人口の5割、家屋の4割が被災しました。戦前に芸術家としての地位を確立していた本協会創立会員たちにとっても、この時期は、制作のままならない時代でした。戦局の悪化に伴い、巷の展覧会では戦争画が占める割合が高まり、吉原治良は自身の前衛的な仕事を抑制せざるを得ませんでした。伊藤継郎は満州に出征、終戦後1年間の過酷なシベリア抑留を経て、復員後も療養生活を送りました。

終戦後、芦屋の街も次第に復興を遂げます。衣食住の心配から抜け出し始めた人々は、豊かな文化を求めました。創立会員たちも自由な制作を取り戻しつつあり、その一人、吉田一夫の言葉を借りれば「文化都市芦屋の基礎をきつくだ」²との意気込みが高まり、本協会の結成が実現に向かっていきました。

2 活動内容

結成当初から本協会の活動の柱は、公募展「芦屋市展」と

「童美展」です。芦屋市展（当初は芦屋市美術展覧会）は、第1回の募集要項に「何人も随意に応募することができます」とあり、応募者の居住地や年齢を制限しない、開かれた展覧会でした。この伝統は昨年2022年に第66回を数えた現在でも続いています。本協会会員が審査にあたり①、中でも吉原治良が存在感を持ちます。彼は1954年に前衛美術集団「具体美術協会（具体）」を結成しますが、ここに集ったのが、山崎つる子や嶋本昭三、元永定正、正延正俊といった、市展で頭角を現した作家たちでした。彼ら具体メンバーのほか、パリを拠点に活躍した菅井汲らを輩出した芦屋市展は、関西における若手作家の登竜門となりました。童美展（当初は阪神間児童画展覧会。3回目から児童創作美術展、第20回から童美展）についても、最も多い時期で1万点を超える作品が集まり、就学前の子どもたちの元気で自由な表現が育まれていきました②。

この他にも、写生大会や洋画・日本画の講習会、二科会や新制作協会など各会員が所属する美術団体展の鑑賞会など、活発な活動が続きます。機関誌『アシヤ美術』が計3回刊行され、「現代児童画のあり方」「現代美術について」など、各会員の芸術観が窺える座談会の模様が掲載されました。

3 芦屋の文化に果たした意義

芦屋の地に集った多彩な芸術家たちが、戦後の復興期、それぞれの分野をこえて団結し、市民の文化のために尽力した、芦屋市美術協会。本協会は、市民が美術に親しむ土壌を作ったのみならず、具体という今や世界的な前衛美術集団への登竜門となった芦屋市展をスタートさせたことから、芦屋の文化における重要な要素であったことがわかるでしょう。

『アシヤ美術』第1巻（1949年8月発行）において、本協会の初代会長・当時の市長猿丸吉座衛門や2代目会長・吉原治良は、芦屋における美術館の設立を強く望んでいました。当館が開館したのは1991年。実現までに40年以上の月日を要しましたが、現在、吉原をはじめ本協会会員たちの作品など、当館には約1,500点にのぼる美術作品が収蔵されています。

このたび当館では、2023年4月より、本協会の3代目会長を務めた伊藤継郎の個展を開催します。本協会会員たちが結成当初に制作した作品も展示する予定です。当時の彼らの意気込みを伝える作品をぜひご覧ください。

川原百合恵（当館学芸員）

註

1 芦屋市美術協会会則第1章より。

2 吉田一夫「歪んだ年輪（芦美のあゆみ）」『芦屋美協40年「よもやまばなし」』掲載予定原稿より（本書は1988年に発行予定で芦屋市美術協会が編集していたが、実際には刊行されなかった）



①第3回芦屋市展審査風景、1950年。首席の人物左から伊藤継郎、吉原治良。作品は小出泰弘。伊藤継郎旧蔵写真より。



②第20回童美展会場風景（芦屋市立公民館）、1969年。芦屋市立美術博物館「童美展 1948-2008」2008年発行、p.34より転載。

休館中の美術博物館

2022年7月から機械設備等改修工事による長期休館となりました。
休館中の美術博物館の活動を掲載します。

ライブイベント「Music / Museum」 2022/7/3

休館中の一日を利用し、何も無い空間となった美術博物館そのものを体感するイベントを開催。館内外ともに音楽家によるライブや、学芸員による館内見どころツアーを実施、過去の展覧会のポスターやチラシを掲示した。

共催：night cruising
Photo：Ayaka Onishi



moshimoss

内田輝/Akira Uchida

動物園スケッチ会 —どんな色、姿？自分だけの動物を描こう！— 2022/7/17

小学生以上を対象に神戸市立王子動物園にて実施。参加者は自由に動物を選び、表したいポイントを考えながら思い思いに描いた。終了後には鑑賞会を行った。



教育普及事業 芦屋市立山手小学校での出前授業 2023/1/26,30～2/1

4年生が体験したワークショップ「いろいろな塗り方で絵具カード作り」では、本校が所蔵する画家・伊藤継郎の作品を鑑賞し、伊藤のように筆以外の様々な道具（ヘラ、ペインティングナイフ、クシ、フォークなど）を使って、多様な色彩と質感に満ちた独自の絵具カードを制作した。

5年生のワークショップ「コラージュでオリジナルの作品をつくろう」では、どんな作品をつくりたいかイメージしたあと、チラシから素材を切り抜き、紙や透明シートに貼り付け、コラージュ作品を制作した。複数の透明シートを重ねたレイヤーの効果も楽しく、オリジナルの作品を生み出した。



4年生「いろいろな塗り方で絵具カード作り」完成作品



5年生「コラージュでオリジナルの作品をつくろう」完成作品

市広報紙『広報あしや』（毎月1日発行）コラム連載「あしや芸術さんぽ」

2022/8～
2023/2

芦屋の風景が描かれた館藏品などを元に、芸術家達が切り取った芦屋と現在の風景を紹介するコラムを連載。芦屋で結成された具体美術協会によって野外展が行われた芦屋公園、小出楯重の描いた仏教会館など、芦屋ゆかりの芸術家たちと芦屋の風景の関わりを学芸員が紹介。当時の芦屋の風景と現在の風景の比較も興味深いコラムとなった。



小出楯重《芦屋風景（仏教会館）》1927年頃



現在の前田町

芦屋市役所ホームページ
『広報あしや』バックナンバー
<https://www.city.ashiya.lg.jp/kouhou/kensaku/r4/index.html>

美術博物館ホームページ掲載 学芸員コラム 2022/8～2023/3

学芸員によるコラムを毎月1日に掲載。展示会の報告、芦屋の戦国時代の文化財、「芦屋カメラクラブ」の誕生についてなど、美術・歴史両部門と多岐にわたる内容となった。



《三好長康山論裁許状》1560(永禄3)年 当館蔵

「学芸員コラム」当館ホームページ掲載
<https://ashiya-museum.jp/news/17091.html>

「休館中」という状況だからこそ出来るイベントの開催、休館中だからこそ可能となった多数のコラム、この活動により館藏品や作家について、また美術博物館の役割についても、たくさんの方に知っていただける機会になったのではないかと思います。2022年度は具体美術協会関連の展示会が各地で数多く開催され、その影響によってか当館で過去に発行した図録や書籍への問い合わせも増えました。工事下での勤務には大変なこともありましたが、職員にとってはこの期間だからこそその発見がたくさんありました。長期休館という貴重な期間で得たことを活かし、再開館した美術博物館で皆さまのご来館を心よりお待ちしております。

(広報担当)

Twitter

Twitterアカウントにて、イベント告知、コラム掲載のお知らせ、館内や前庭の様子、所蔵作品の他館での展示について、日々つぶやきを更新。



@ashiyaibihaku



図録・書籍の通信販売

休館中は館内にて販売することができないため、ホームページで過去展の図録や書籍の一覧を掲載。電話・メールにて注文を受付。開館後も継続予定。



<https://ashiya-museum.jp/news/17065.html>

所蔵作品の他館展示会への貸出

- ◆「酒づくりのスタート 精米」
白鹿記念酒造博物館 2022年7月16日～11月20日 芦屋川水車絵図
- ◆「時を超えるイヴ・クラインの想像力—不確かさと非物質的なもの」
金沢21世紀美術館 2022年10月1日～2023年3月12日 今井祝雄、金山明、白髪一雄、白髪富士子の作品 計5点
- ◆「すべて未知の世界へ—GUTAI 分化と統合」
大阪中之島美術館、国立国際美術館 2022年10月22日～2023年1月9日 嶋本昭三、山崎つる子ほか具体美術協会会員の作品 計45点
- ◆「Japan. Body_Perform_Live. Resistenza e Resilienza nell'arte contemporanea giapponese」
PAC (Padiglione d'Arte Contemporanea イタリア・ミラノ)
2022年11月22日～2023年2月12日 田中敦子、白髪一雄の作品 計4点

鶏形埴輪 金津山古墳出土 5世紀後半

古墳の前方部周濠から出土した動物形埴輪。頭部のみであり、鶏冠と嘴は欠損している。顔面全体に線刻による斜格子で体毛を表現している。両側面には耳を大きく表現している。



8

2023年度の展覧会予定

2023.4/15～7/2	芦屋の美術、もうひとつの起点 —伊藤継郎
2023.7/22～10/9	最後の浮世絵師 月岡芳年(仮)
2023.10/28～2024.2/4	art resonance vol.01 時代の解凍
2024.2/10～2/18	第41回 芦屋市造形教育展
2024.3/5～3/24	第67回 芦屋市展
各展覧会に準ずる	歴史資料展示室 常設展

美術博物館ホームページ <https://ashiya-museum.jp> | Twitter @ashiyaibihaku

芦屋市立美術博物館 〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-25 美博だより 2023年3月3日発行(初版第1刷)
Tel:0797-38-5432 Fax:0797-38-5434 発行者 芦屋市立美術博物館